

朝顔・昼顔・夕顔・夜顔

——体系化を目指した花の名——

吉野政治

【要旨】「朝顔」は奈良時代には特定の花の名ではなかった。現在の牽牛花を「朝顔」と呼ぶようになったのは平安時代からのことだとされるが、同じ頃に同じく蔓性草本で夕方に漏斗状の花を開くものが「夕顔」と呼ばれるようになるのは、「朝」夕」という語の対応が前提となっている。江戸時代には「昼顔」という名が現れるのも「朝—昼—夕」という語の体系がその前提としてあり、明治時代に新渡来種に「夜顔」の名が付けられたのも「昼—夜」という対語が基になっているのである。本稿はこれまで植物学的な類似によって注目されてきたこれらの名前を語の体系という観点から捉えてみたものである。それによって、夕顔と夜顔との混同の理由が理解されることになる。

【キーワード】語の体系、朝顔、昼顔、夕顔、夜顔

はじめに

「さくら花露に濡れたる顔見れば泣きて別れし人ぞ恋しき」
〔拾遺集〕巻6・三〇二)のように花を人の顔に見立てて言い、逆に人の顔を花に譬えて「昨日見し花の顔とて今朝見れば寝てこそさらに色まさりけれ」〔後撰集〕巻3・一二八)などと言うこともある。『萬葉集』に

うちひさつ宮の瀬川の可保婆奈の恋ひてか寝らむ昨夜も今夜も

(萬14・三五〇五)

高円の野辺の容花面影に見えつつ妹は忘れかねつも

(萬8・一六三〇)

石橋の間に生ひたる貌花かほばなの花にしありけりありつつ見れ

ば (萬10・二二八)

美夜自呂の砂丘すかへ辺に立てる可保かほ我わ波は奈な咲さきいでそねこめ

てしのはむ (萬14・三五七五)

と見える「顔花かほばな」「顔が花かほばな」という語は、そうした見立てや比

喩表現を踏まえたもので、顔のような花冠を持つ花といった意

味であり、既に『八雲御抄』に右の「高円の野辺の容花かほばな」につ

いて「たゞ秋の野の花也。さしていづれの花とはかぎらず。花

のかほなどもよめれば同心なるべし。かほばな、かほどり……

その花鳥となくうつくしき花鳥也」と見えるように特定の花を

指すものではないようである。「朝顔」という語はこの「顔花」

を踏まえて成立した語であって、既に早く藤井高尚『松の落

葉』(天保十一(一八四二)年刊)に「あさがほとは、あした

にさくかほ花をなべていへるにて、ひとつ草の名にはあらず」

とあるように朝に咲く「顔花」の意であったものと思われる。

『萬葉集』に現れるアサガホは次の五例である。

山上臣憶良詠「秋野花」歌二首

秋の野に咲きたる花を指折りかき数ふれば七種の花 其

①秋の花尾花葛花瞿麦の花 女郎花また藤袴朝顔の花 其

二 (萬8・一五三七〜八)

②朝果あさかは朝露負ひて咲くといへど暮陰あやみかげにこそ咲きまさりけ

れ (萬10・二二〇四)

③展あひま軋まひ恋ひは死ぬとも灼然色あせしやうには出でて朝顔の花

(萬10・二二七四)

④言に出でて云はばゆゆしみ朝顔の穂には開きでぬ恋もす

るかも (萬10・二二七五)

⑤吾が目妻人は放はなくれど安佐我保あさわがほの年さへごと吾は離わかる

がへ (萬14・三五〇二)

これらのアサガホは『新撰字鏡』に「桔梗 二八月採根曝干。

阿佐加保 又云 岡止々支」(天治本卷七・15ウ)、「桔梗

……加良久波 又云阿佐加保」(享和本卷七・14オ)とあるこ

とから桔梗ききやうであるとも、「蘇悉地羯羅經」寛弘五年点などに

「木槿きぎん」とあることからまた木槿きぎんであるとも言われている。少

なくとも例②は現在の朝顔ではないことは確かである。

『萬葉集』のアサガホが今日の朝顔とは考えられないことは、

その来歴からも説明されている。例えば植物学者白井光太郎の

名著『植物渡来考』(昭和四年、有明書房)に言う。

支那の原産なり。名医別録に始めて記録せらる。日本にては和名抄に牽牛子アサガホと訓す。古今集にケニゴシと呼べり。萬葉集の秋の七草の歌にアサガホあれども今のアサガホは野生の植物に非ざれば当時は別種の植物をアサガホと呼びしものと思はる。

すなわち、アサガオはその種子を薬用(下劑・利尿劑)として用いるために遣唐使などが日本にもたらしたものであるとされる。『和名類聚抄』(卷二十・草部)に「陶隱居本草注云、牽牛子(和名阿佐加保)此出於田舎。凡人取之牽牛易菜。故以名之、延喜式(典葉寮)に「牽牛子丸五劑(牽牛子三斤十三兩)」などあるのはその用途に用いられた種子のことであり、『古今昔物語集』卷八・第五語に「酸キ酒ノ濁リタルニ牽牛子ヲ濃ク摺リ入レテ吞マセテハ、其ノ奴原ハ下痢テハ有ナンヤ」とあるのもその例である。

アサガオという植物の来歴は右のとおりであるが、本稿で考えたのは「朝顔」という名とその名に拠って成立した「夕顔」「昼顔」「夜顔」という名についてである。以下で名称を問題にする場合には「朝顔」とカギ括弧を付け、植物そのものを問題にする時にはカギ括弧を付けない。「夕顔」などについて

も同様である。

2 朝顔の花(漢名「牽牛花」)

現在の朝顔が「朝顔」と呼ばれたことが確認できるのは中古(平安時代)からである。

試みに八代勅撰和歌集と平安時代の代表的な散文作品に現れる「朝顔」の数を次に掲げる。併せて次節で取り上げる「夕顔」の数も示しておくことにする(*は用例の無いことを示す。平安時代の「昼顔」「夜顔」はこれらの作品以外の史料にも現れない)。

	【朝顔】	【夕顔】	(備考)
古今和歌集	*	*	「けにこし」1
後撰和歌集	2	*	
拾遺和歌集	3	*	「けにこし」1
後拾遺和歌集	2	*	
金葉和歌集	*	*	
詞花和歌集	1	*	
千載和歌集	*	*	

新古今集	3	1
土佐日記	*	*
伊勢物語	1	*
大和物語	2	*
平中物語	*	*
篁物語	*	*
蜻蛉日記	*	*
源氏物語	7	6
枕草子	3	2
和泉式部日記	*	*
狭衣物語	*	*
落窪物語	*	*
夜の寝覚	*	*
浜松中納言物語	*	*
堤中納言物語	2	*
更級日記	*	*

「朝顔」(寝起き顔?)・
 人名5) 「夕顔」(人名
 5)
 「朝顔」(寝起き顔) 1
 「朝顔の里」 1
 「朝顔」(寝起き顔) 1
 「朝顔」(寝起き顔) 1
 「朝顔」(人名) 1
 「夕顔」(人名) 1

以下に用例を示すが、「朝顔」が現在のアサガオであると判
 断できる部分に傍線を引くことにする。

後撰集

朝顔の花、前にありける曹司より、男のあけて
 出で侍りけるに
 よみ人しらす

もろともにおるともなしにうちとけて見えにけるか
 な朝顔の花
 (11・七二六)

ひとり侍りけるころ、人のもとより「いかに
 ぞ」ととぶらひて侍りければ、あさがほの花に
 つけてつかはしける
 よみ人しらす

夕暮のさびしきものは槿の花をたのめる宿にぞあり
 ける
 (18・二二八八)

拾遺集

君来ずは誰に見せまし我が宿の垣根に咲ける槿の花
 (3・一五五)

あさかほ

我が宿の花の葉にのみ寝る蝶のいかなる朝か他所よ
 りは来る
 (7・三六四 物名)

朝顔の花を人のもとに遣はずとて 藤原道信

朝顔をなにはかなしと思ひけむ人をも花はさこそ見
 ららめ
 (20・二二八三)

後拾遺

朝顔をよめる

和泉式部

ありとても頼むべきかは世の中を知らずるものは朝

顔の花

(4・三二七)

人の草合せしけるに、朝顔・鏡草など合せける
に、鏡草の勝ちにければよめる よみ人しらず

負け方の恥づかしげる朝顔をかぐみ草にも見せてけ

るかな

(20・二二四)

詞花集

賀茂の斎ときこえける時、本院の透垣に朝顔の
花の咲き懸りて侍るをよめる 藤子内親王

神垣にかかるのならば朝顔もゆふかくるまでにはは

ざらめや

(3・一一四)

新古今集

起きて見んと思ひしほどにかれにけり露よりけなる

あさがほの花

(4・三三三)

山がつの垣ほにさけるあさがほはしのゝめならで逢

ふよしもなし

(4・三四四)

なにか思ふなにをかなげく世の中はたゝあさがほの

花の上の露

(20・一九一七)

『伊勢物語』

朝顔・昼顔・夕顔・夜顔

われならで下紐とくなあさがほの夕影またぬ花には
ありとも (三七段)

『大和物語』

白露の置くを待つ間のあさがほは見ずぞなかなかあ
るべかりける (三九段)

垣ほなる君があさがほ見てしがな帰りて後はものや
思ふと (八九段)

『源氏物語』(用例は一部)

とく、御格子まゐらせ給ひて、朝霧をながめ給ふ。枯

れたる花どもの中に、朝顔あまがほの、これかれにはひまつは

れて、あるかなきかに咲きて、匂ひも殊にかはれるを、

折らせ給ひて、たてまつれ給ふ。……

見しをりの露わすられぬ朝顔の花のさかりは過ぎ

やしぬらん

などこきえ給へり。……

秋はてて霧のまがきにむすばほれあるかなくかに

うつる朝顔

(朝顔)

龍胆、朝顔のはいまじれるませもみな散り乱れたるを

(野分)

よそへてぞ見るべかりける白露のちぎりかおきし朝顔
の花 (宿木)

『枕草子』

朝顔の露落ちぬさきに文書かむと (三四段)

草の花は 撫子 唐のはさらなり 大和のもめでたし

女郎花 桔梗 朝顔 ……夕顔は花のかたちも朝顔に
似て (八三段)

『堤中納言物語』

淑景舎は「朝顔の昨日の花」(参考。朝顔の昨日の花は

枯れずとも人の心をいかがたのまむ。古今六帖4・紀友

則)となげかせ給ひしこそ、ことはりと見奉りしか。

朝顔の疾くしぼみぬる花なれど明日も咲くはとたのま
るるかな (はなだの女御)

朝のうちには花咲き、夕べに凋むことで、儂さを表象するのは
木槿も同じである。『塵袋』卷三に「槿花ハアサカホノ花カ別

ノ物カ」の項に「アサガホトムクゲトハ、アシタニサキテ、夕

ニオツル物也。是ノ故ニモノノ名ミナマギレテ、カヨヒモ

チフ」とあるように、これらの朝顔は木槿とも考えられる。し

かし、「垣根に咲ける朝顔の花」(拾遺集)、「本院の透垣に朝顔

の花の咲き懸りて」(詞花集)、「垣ほなる君があさがほ」(大
和物語)、「これかれにはひまつはれて」(源氏物語)、「夕顔は
花のかたちも朝顔に似て」(枕草子) などあるものは牽牛花
としか考えられない。桔梗の花は鐘形花冠と呼ばれる筒状の花
であり、木槿は灌木であって、花冠は複数の花弁からなる。こ
の大形の漏斗状の花冠を持つ蔓性の一年草である牽牛花の名と
して「朝顔」が用いられたことが後の「昼顔・夕顔・夜顔」と
いう体系を形づくる前提となるのである。

3 「夕顔」(漢名「壺盧」)

夕顔はかつて和歌の世界ではタソカレグサ、またス、ケバナ
ス、ケノハナと呼ばれていたもののようである。『本草綱目啓
蒙』(享和三年一八〇三刊、卷二十四・菜之三)に、

壺盧 ス、ケバナ古歌 ス、ケノハナ タソカレグサ同上
ユフガホ ユウガウ防州 ユウゴ阿州 ナリヒサゴ
シトミグサ名葉

とあり、『藻塩草』(十六世紀成、卷八・草部)にも次のように
ある。

夕貌 ゆふかほの花 ……たそかれ草(異名。感玉にもあ

り) たそかれに光そへたるたそかれにまがひてさける花の名(これもゆふかほの事也) まとはれてさく(○あさてほすしつかはつ木をたよりにてまとはれてさく夕かほのはな)

先に掲げた表からも窺えるように平安時代には「夕顔」の用例は「朝顔」に比べて多くはないが、『源氏物語』と『枕草子』に現れることによって広く知られていたようである。

切懸きりかだつものに、いと青やかなるかづらの、心地よげにはひかかれるに、白き花ぞ、おのれひとり、憂みの肩開けたる。……かの、白く咲けるをなん、夕顔ゆがなほと申し侍る。花の名は人めきて、かう、あやしき垣根になん、咲き侍りける。……軒のつまごとに、這ひまつはれたるを……白き扇の、いとうこがしたるを、「これに置きて、参らせよ。枝もなさげなめる花を」ととらせれば、

(『源氏物語』夕顔)

夕顔は花のかたちも朝顔に似て、言続けたるに、いとをかしかりぬべき花の姿に、実のありさまこそ、いとくちをしけれ。などさはた生ひ出でけむ。ぬかづきなどいふものやうにだにあれかし。されど、なほ夕顔といふ名ばかりは

朝顔・昼顔・夕顔・夜顔

をかし。

(『枕草子』六四段)

中世(鎌倉・室町・安土桃山時代)もまた「夕顔」の例は少ないが、「朝顔」と共に現れることが多いのが注目される。『平家物語』と『徒然草』の例を次に掲げる。

女院の御庵室を御覧すれば、軒には鶯うす・椋あぶらばはひかかり、しのお交りの萱草わすれぐれ、(平家物語・灌頂卷「大原御幸」) 籠の内も猶羨まし山がらの身のほどかくす夕顔の宿

(平家物語・卷八「山門御幸」)

家にとりたき木は……。草は山吹、藤、杜若、なでしこ。池には蓮。秋の草は菝、すすき、きちこう、りんどう、……つた、葛、朝がほ、いづれもいと高からず、ささやかなる牆かきに上げからぬよし。(徒然草・一三九段)

六月のころ、あやしき家に夕顔の白く見えて蚊遣火ふすふるもあはれなり。(徒然草・一九段)

『枕草子』に「夕顔は花のかたちも朝顔に似て」とあるように、「夕顔」という名は朝顔の花との類似から名づけられたものである。第2節で引用した『塵袋』に「ヒサゴノ花ヲ夕顔ト云フニ対シテ牽牛子ノツルヲ朝顔ト云ナラハセリ」とあるが、「朝顔」「夕顔」という語の出現順序から見て誤りと思わ

れる。「夕顔」という名はアサカゲ・ユフカゲ、アサギリ・ユフギリ、アサナギー・ユフナギ、アサヒー・ユフヒなど「アサーユフ」という対によるもので、一日の明るい時間の初めをアサと言ひ、その終わりをユフと言うが、朝に咲く朝顔に対して夕に咲く花ということであろう。『名語記』（建治元年（一二七五）

成、卷九）にも「ユフガホ如何。コレハヒサゴノ異名ナリ。花ノユフベニヒラクレハ、アサガホニ対シテ、ユフガホトハイヘル也。ユフハユフベノ義也。」とある（暗い時間の始まりをユフベと言ひ、終わりをアシタと言ふ。『名語記』はこの区別をしていないようである）。

4 「昼顔」「旋花」「鼓子花」

現在「昼顔」と呼ばれる植物の漢名は「旋花」であり、それに対するかつての和名はハヤヒトグサあるいはカマであった。

旋花：一名鼓子花；和名波也比止久佐 一名加末

（『本草和名』）

旋花 本草云旋花一名美草（旋音賤和名波也比止久佐）

（『和名類聚抄』）

ハヤヒトグサは単人草であり、この植物は南方から渡ってき

たものであることを意味するものようである（新村出「朝顔の故郷は南洋」『全集』第十卷所収。また、『新撰字鏡』に「旋復花 須万比支久佐。一本云草人草」（天治本）などあるのは、「旋花」と「旋復花」（ラグルマ）とを誤って混同したものと云われる。

このハヤヒトグサ・カマが「昼顔」と呼ばれるようになったのは近世になってからのことのように、林羅山『多識編』（寛永一七年一六二二）に、

旋花 波也比登久佐 今案 比留加保（是鼓子花也）

（卷二「蔓草部」）

とあり、平賀源内『物類品彙』（宝曆十三年一七六四）に、

旋花 和名ヒルガホ。仙台方言アメフリ。所在多シ。蒨穉

葉ノゴトク三尖ニシテ小ク、花牽牛花ノゴトクシテ

又小ナリ。 （卷之三）

とあり、また小野蘭山の『本草綱目啓蒙』（享和三年一八一〇）

文化三年一八〇六）に次のようにある。

旋花 ハヤヒトグサ 和名 ヒルガホ ハタケアサガホ 和州

……夏月、葉間ニ花ヲヒラク。辰後ニ開キ日夕ニ至

テ萎ム。……形、牽牛花ニ似テ、小シ。

(卷十四草部・草之七)

右の『物類品隲』『本草綱目啓蒙』の説明にあるように、「昼顔」という名もまた「夕顔」と同様に朝顔の花との類似によるものようである。新井白石の『東雅』（享保二年（一七一七））にも「倭名抄に牽牛子は、アサガホといふと註せり。アサガホとは朝に咲く花也といふ即是也。瓠瓜花をユフガホといふも、アサガホに對し言ひし名にて、其花の夕に咲くをいひ、亦これに因りて旋花をヒルガホともいふなり」（牽牛子アサガホの条）とあり、さらに伴信友『比古婆衣』（文久元年（一八六一）刊）にも「あさがほとは、朝とく咲出る花の貌のいとうるはしきが日毎に新しく咲かはりて其朝がほのことにめでたきを稱へたる名にぞあるべき。それが類にて昼間のみ咲くを昼顔といひ、また夕さり白く咲出て黄昏時に花のかほの目にたちて見ゆるを夕顔と云ふなど、おのづから相對へておもふべし」（卷之三「朝顔」とある。また、『本草綱目啓蒙』にハタケアサガホという地方名が紹介されているが、『物類称呼』（安永四年（一七七五））にも、

鼓子花　ひるがほ　○陸奥及上野下野越後にて。あめふりばなど云。越前にて。こうづるといふ。相州海浜にて。へ

びあさがほといふ。

とあるのも、朝顔の花との類似から来ているのであろう。

こうして、「昼顔」の名が定着すると、「アサーユフ」という対語を基にする「朝顔・夕顔」に代わって、「朝顔・昼顔・夕顔」という体系が意識されるようになったようで、貞徳門下の松江重頼著『毛吹草追加』（正保四年（二六四七））には「朝顔」（秋部）「夕顔」（夏部）とともに「昼顔」（夏部）の題目が挙げられ、次のような句が掲げられている。

朝顔や寝起には似ぬ花の貌　盛庸

朝顔を朝かほで見ぬ人もなし　無為

あさかほや見に行ならば泊かけ　長治

夕顔や所も家も五てう敷　貞直

をのれとや垣ゆふかほの花のつる　正秀

白瓜と見し夕貌の空目哉　徳本

夕かほの花に螢は紙燭かな　正良

昼顔や照日さかりを花盛　良和

昼貌に露をのせたし午の時　令巾

さらに時代が降ると、橋保国『画本野山草』（宝曆五年（一七七五））には「朝顔」「昼顔」「夕顔」が並んで描かれている

【本稿末の図】。

5 「夜顔」(英名 Moon-Flower)

ところで、ヒルは一日の明るい時間を「アサ・ヒル・ユフ」と区分した時の一時間帯を意味する場合と、日没から日出までの時間帯をいうヨルに対して、日出から日没までの時間帯を意味する場合とがある。後者の時間帯に花咲く植物も存在する。例えば貞治五年(一三六六)成立の『詞林采葉抄』(巻九)に

「夜一夜草ト云草アリ。此草ハ暮陰ニ花開キ夜開レバシボム物也。此夜一夜草ハ本草ニ曰景天草矣」とある。しかし、この

「夜一夜草」を含め、「夜顔」という名が付かなかつたのは、「昼顔」という名がまだ成立していなかつたからであろう。「夜顔」という名は「昼顔」が成立した後の明治時代のことのものである。牧野富太郎「夜顔」(『日本園芸会雑誌』第八十三号、明治三十一年三月二十七日発行、『牧野植物学全集 植物集説下』所収)に、その植物の絵(【本稿末の図】)と名の由来が紹介されている。

田中芳男先生新ニ夜顔ノ名アリ此植物夜、花ヲ開キ朝アサ上リテ乃チ凋ム由テ英国ニ之レヲ Moon-flower (月花)ト

呼ブ田中先生夜顔ノ名即チ此月花ト其致相暗合セリ。

此植物ハひるがほ科中ノはりあさがほ属ニ属シ、其学名ヲ Calonyction bona-nox BOJ ト称シ又 Ipomaea bona-

nox LINN. 等ノ異名甚ダ多シ元ト熱帯亜米利加ノ原産ニシテ今ハ世界ヲ通ジテ各方ニ栽植セラレタリ蔓莖放縱其葉長柄ヲ有シテ葉面心臟形ヲ成シ花ハ大ニシテ径四寸ヲ超ヘ花筒ハ殊ニ狭長ナリ花色白ク其夜花タルノ通則ニ背カズ恐クハ蛾ノ訪問ヲ受クルナラン……

植物学者田中芳男がこの花の名を「夜顔」と命名しえたのは、朝顔と同様に漏斗状の花を付けるからであろうが、その前提として「昼顔」の名が先行している必要がある。ただし、その先行する「昼顔」は「朝―昼―夕」という時間帯の区分による「夕」であり、「夜顔」は「昼―夜」という一日の区分による「夜」である。このことを明確に意識しないことによつて、「夜顔」と「夕顔」との間で混同が生じているようである。「夜顔」は花の咲き続ける時間に着目した名であり、「夕顔」は開花時間に注目した名であるが、「夕顔」は

いとどまた光や添はむ白露に月待ちいづる夕顔の花

(新後撰集・秋上・二二八九・藤原朝宗)

のように Moon-flower (月花) のような風情が注目されることがあり、『本草綱目啓蒙』にも「凡フクベ、ヒヤウタン類ハ、皆白花ニシテ夕ニ開キ朝ニ萎ム。故ニ総ジテ、ユウガホト呼」と説明されてもいる。おそろくそうしたことから和歌山県や新潟県の一部の地方で「夕顔」がヨルガオ・ヨーガオと呼ばれているのであろう(『日本植物方言集成』八坂書房刊)。そしてまた、「夜顔」も民間ではユウガオとも呼ばれることがあるのである(牧野富太郎「ヒルガオとコヒルガオ」)。

あとがき

奈良時代に種子を薬用として将来した朝顔は平安時代には、世の中を何に譬へむ夕露も待たで消えぬる朝顔の花(順集) 明日知らぬ露の世に経る人にだになほはかなしと見ゆる朝顔 (八任集)

などのように儂さや無情を表象する景物となった。前掲新古今集(巻20・一九一七)の、

なにか思ふなにをかなげく世の中はたゝあさがほの花の上の露

は釈教歌であり、「清水観音御歌となんいひ伝へたる」という

朝顔・昼顔・夕顔・夜顔

左注がある。中世においても「その主と栖と無常を争ふさま、いはばあさがほの露に異ならず」(方丈記) などそうした捉え方が一般的であるが、茶の湯が完成の域に達した桃山時代天正年間には茶花として用いられるようになる。利休と秀吉の朝顔の茶会の逸話は有名であるが、天王寺屋宗及や小堀遠州なども朝顔を茶花に用い、古田織部は蔓性植物の代表例のように扱っているようである(寺田孝重「茶人と茶花」、「淡交」別冊26)。さらに江戸時代になると園芸植物として観賞されるようになり、享保八年(一七三三)にはわが国最初のアサガオ専門書の三村森軒の『朝顔明鑑抄』が刊行され、文化・文政の頃には盛んに新品種が開発され栽培されたことはよく知られている。小笠原左衛門尉亮軒著『江戸の花比べ』(青幻舎一〇〇八年四月)によると、当時の朝顔関係書に次のようなものがある。

- | | | |
|------------------------------|-------|------------|
| 『朝鮮珍花 <small>あがほ</small> 薺集』 | 峰岸正吉 | 文化十二年一八一五刊 |
| 『牽牛品類図考』 | 峰岸正吉 | 文化十二年一八一五刊 |
| 『花壇朝顔通』 | 壺天堂主人 | 文化十二年一八一五刊 |
| 『 <small>あがほ</small> 花合』 | 会主市兵衛 | 文化十三年品評会番付 |
| 『あさがほ百首』 | 北風町交信 | 文化十三年一八一六刊 |
| 『あさがほ叢』 | 四時庵形影 | 文化十四年一八一七刊 |

『牽牛品』

峰岸龍父

文化十四年一八一七刊

『丁丑朝顔譜』

秋水茶寮瘦菊

文化十五年一八一八刊

『牽牛花水鏡前編』

秋水茶寮瘦菊

文政元年一八一八刊

『舜百華』

龍川亭一貫子

文政二年一八一九刊

『牽牛品』

峰岸正吉

文政二年一八一九刊

このように朝顔はそれぞれの時代にそれぞれの顔を持つ。
 「夕顔」「昼顔」「夜顔」という名はそうしたそれぞれの時代の朝顔の対として登場してくる。したがって、平安時代に現れる「夕顔」はその時代の朝顔と同様に儂さの表象であるが、近世に成立した「昼顔」にはそうした意味合いは感じられない。明治以降に成立した「夜顔」もまた神秘的な感じを与えるだけのようである。しかし、いづれにせよ「夕顔」「昼顔」「夜顔」の名は「朝顔」という名を基に成立した名と言える。

(二〇〇九、一〇、一七稿、二〇一〇、四、一四補筆)

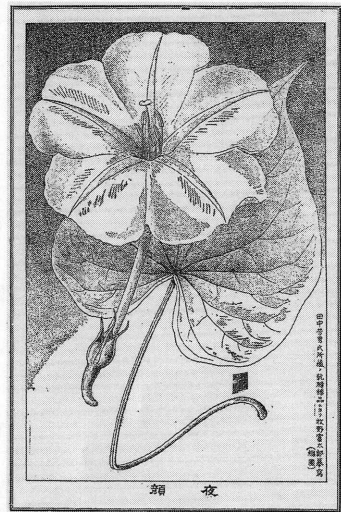


橘保国著『画本野山草』より

朝顔・昼顔・夕顔・夜顔



橘保国著『画本野山草』より



牧野富太郎著『植物集成・下』より